

高等部大学受験科「E・Lab（イーラボ）」本格始動

「一人ひとりを生かす教育」が進化する

未来を見通す学びを深めて創造的な人間を育成

塾に変革が起きている。従来の「学習指導」とは異なる新たな教育の創造に挑んでいるのが「英泉塾」(さいたま市・戸田市)だ。有限会社EISEN代表取締役・安田卓史氏は「合格や成績アップは、子どもや保護者と交わした約束、塾の一つの使命にすぎません。英泉塾は「合格のその先」にこそ有用な、受験勉強で獲得する知識以外の価値を提供します」と意気込む。昨年度から高校生対象にキャリアデザイン学習「E・Lab」(イーラボ)を始動、多様な講座を行っている。大学で、社会で、人生で必要な「知」「能力」を育む「Explore(探究)・Lab」の真髄に迫る。

大学受験の学習指導とキャリアデザイン教育は両輪

須藤先生は英泉塾の中学部で安田先生から国語を教わっていたらしたか。



有限会社EISEN代表取締役・安田卓史先生。英泉塾の教育理念は「一人ひとりを生かす教育」。思考力・感受性・想像力・共感能力・表現力の涵養と、真に自立した創造的人間の育成を目指す

須藤杏奈先生(以下・須藤) 楽しかったです。テキストの文章にも、ひとつひとつに感動していました。読解テクニックだけでなく、人生や心に残る言葉、いろんなことを学びました。英泉塾の先生方は、生徒一人ひとりに寄り添い「合格のその先」まで本当に考えてくださいました。

5年前に「高等部大学受験科」を創設した理由もそこに繋がりますか。安田卓史先生(以下・安田) 「社会に有用な人間を育てる」ならば、できる限り長い時間、我々の理念に基づく教育活動を行いたい。大学受験まで彼らにより多くを学べる環境があれば、広い視野で進路を考え、自分を深く見

つめ、人生を主体的に選択する態度を身に付けられます。

須藤先生は、高等部で大学生講師をしていた時代から「E・Lab(イーラボ)」の発想があつたんですか? 須藤 自身「東大合格」がゴールになつてしまい、自分は何がしたいのか、大学をどう活用するか、高校時代にもっと考えておく必要を痛感しました。社会と繋がる経験も無のまま就職活動に入り、急に「社会にどう貢献したいか」考えさせられるのも違和感がありました。高校や大学の在学中に考えるべき、経験すべきことが行われていない。「塾ならできる」と思い、「E・Lab」の企画を自分から持ち

込みました。

安田 「社会人基礎力の養成」や「主体性や問題解決能力を鍛えるプロジェクト学習」などの講座は既にありましたが、高校生は多忙で、どうしても学習指導がメインになりがち。そこで須藤が「E・Lab」をコンテンツ開発から手掛けてくれた。いま高等部は、「学習指導」と「キャリアデザイン教育」が、完全な両輪となって動いています。ただ「E・Lab」は推薦・AO・大学入試突破のための対策講座ではありません。学びそのものが目的の「純度の高い学び」、学問や自分を深く掘り下げ、見つめる機会や環境を提供するのが「E・Lab」です。結果

的に、推薦、AO、新しい大学入試にもふさわしい内容となっていて、進学実績にも確実に成果が現れています。2020年の大学受験制度改革にも充分対応できると? 安田 我々にはむしろチャンス。追い風を感じます。以前より保護者の方々の理解や支援も格段に高まりました。

Explore (Explore) や Eisen (Eisen) の「E」 世界と自分を探究する 知への冒険

いまの高校生たちのキャリアデザインにおける問題点は何でしょうか。須藤 大学や学部を選ぶ基準が、偏差値や「就職に有利だから」。大学の意義や、学問の自身はあまり考えない。「自分が何を学びたいかわからない」という悩みを抱える生徒がすごく多いです。

初回講座は「英泉塾講師が語る学問の魅力」。高校生たちの反応はいかがでしたか。

須藤 関心が無かった学問にも「こんなことやっているんだ」と視野が広がったようです。「学問のおもしろさ」を当事者が語ることで、大学で勉強を楽しんでいる姿を見せられたと思いま



須藤杏奈先生は独学で東大に現役合格。母校の県立浦和第一女子高校の探究講座では言語学の講師兼ファシリテーターを務めた

す。

「グループディスカッション」や、「ロジカルシンキング」の反応は? 須藤 目的は建設的な議論です。意見を言うだけではなく、相手から意見を聴くのは難しいけれど練習になる、と話していました。思考を整理するフレームワークで物事の分類の仕方考えたり、今後ものを考える時にも役立つ内容だった、と感じてくれたようです。

現状の高校生に、いちばん「足りない」と思ふことは何でしょうか。須藤 探究心を深める取り組みですね。目の前の課題に追われ、知識を覚

えることで精一杯。問題点を自分で発見し、答えの無い状況から解決策を出す経験や機会があまりにも少ない。安田 「対話力・議論力・伝える力」や「協働力・共感力」などコミュニケーション能力、共同体の力も弱まっています。「E・Lab」では、これらの問題をクリアしていきたい。コンテンツを分類すると次のようになります。

- ① 学問に関する領域
- ② 仕事・能力開発に関する領域
- ③ 人生・自己に向き合う領域

最も大切にしたいのは主体的に動ける「エンジン」です。学問や自分の人生に向き合う「内発的動機」を「E・Lab」で一緒に見つけてあげたい。

「大学での学びと就職の関係」の講座では、企業が求める能力と大学で必要な能力は違う、と伝えたかった? 安田 企業が求める論理は、経済や実学、大学は「研究機関」です。でも大学で本当に「深く」学んできた人なら、企業で求められていることと乖離はあまり無いと僕は思うんです。いまの世の中の多くの人に欠けているの

良い教育をする仲間が増えれば日本の教育はもっと良くなる

大学生講師の方々にも「E・Lab」の活動は生きそうですか? 須藤 もともと能力がある方達ですし、学んでいる分野も違うので、きっと多面的に大学や学問のいろんなことを、高校生に教えてくれると思います。

コンテンツ開発には大学機関の先生も関わっていらっしゃいますね。安田 中山俊秀教授(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)には「E・Lab」の理念と方法に賛同を頂いています。大学で教える多くの有能な学生さんが、迷ったり苦しむ姿を見て、教育制度のいろんな矛盾を肌で感じていらっしゃる。「E・Lab」を英泉塾の外へと広げるにあた

■緊急インタビュー

り、中山先生の支援は大きな力になっています。

須藤 新年度早々にも、中山先生と高校生・保護者が、リアルな悩みや不安を直接話し合う講座を開催予定です。いま進行中の企画は、高校生が社会と繋がって問題解決に挑む「フィールドワーク」。自分たちも社会と関わっている、と実感できる活動を考えています。昨年の講座を通して感じたのは、高校生にとって当事者意識が持ちにくいテーマ設定だと、なかなか活発な議論や、深い議論になりにくいことだったので。

——そのあたりの部分は、小学部・小学部から鍛える必要がある、と？

安田 「興味開発」は、小学生ぐらいからやっておく必要性を感じましたね。いま自分の国で何が起きているのか、遠い国の世界で起きていることに、考えを巡らすことが「知性」であり「教養」だと思っんです。高校生の知性は、レベルの高いものを十分に扱える可能性を持っている。前提知識があればもっと高度な議論ができるはずです。

——小・中学段階で浮かび上がる問題点から高等部でやってほしいことは？

安田 いっぱいありますが、良い意味

での「自尊感情」を満たす、コーチングによるマインドセットは絶対に必要ですね。あと自身自身を深く深く見つけていく「知性」の修得。良書・名著・文学・哲学に触れる機会を「E-Lab」に取り入れていきたいですね。昔の人は本を読みながら自分の人生を「本気で」考えていたと思うんです。

——「塾」がキャリアデザイン教育を担う時代が来た、と感じますか。

安田 (株)Freewillトータルエデュケーション(代表・柴山健太郎氏)ではセルフマネジメントの能力開発を、(株)tyotto(代表・新井光樹氏)はIT系に特化したキャリアデザインを行い、NTTデータとコラボレーションしています。英泉塾は人文



2017年 英泉塾「E-Lab」の取り組み

講座①「学問の魅力を知ろう」



大学生講師など9名が、専攻する学問について高校生にもわかる内容で紹介

講座②「自己分析ワーク」



自己分析ツールで「自分がやりたいこと」を分析し、学部選びのキッカケに

講座③「大学の学びと就職の関係」



社会人OGOBの例を挙げて、大学での学びと就職との関わりを知

講座④「グループディスカッション」



大学生講師をファシリテーターに、日本のハロウィンの問題や解決法を議論

講座⑤「ロジカルシンキング」



「MECE」などフレームワークを用いて、資料から何を読み取れるか実践

科学がメイン。各々の強みを生かして、「学習指導」とは違う教育コンテンツを全国に広げようとしています。新しい教育で世の中にインパクトを与えていくのが我々の役目だろう、と彼らとはよく話しています。

——コラボの可能性もありそうですね。

安田 自分の本当の価値や適性に気づいた高校生が百人いるより千人、一万人いた方が日本にとって良いはずですね。これを英泉塾の中だけに留めず、オープン講座として地域の高校生に、さらに全国の塾さんにも「E-Lab」のコンテンツを広げていきたい。自分たちだけの影響力には限界がある。従来の学習指導も当然必要ですが足りないものが多い。新しい教育を推進するには「仲間」が必要なんです。どういいう人間を育てたいか、塾はどんな社会貢献ができるのか、「塾」の可能性を、そして「良い教育」を「本気で」考える先生方に、導入のハードルは低く、でも素晴らしいクオリティのコンテンツを提供したいと思っています。

——塾業界に新たな使命が見えてくるお話でした。ありがとうございます。